

ش



𐤁

文字

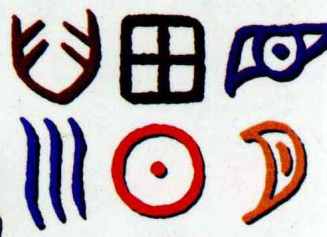
HISTOIRE DE L'ECRITURE

の世界史

ルイ=ジャン・カルヴェ
 矢島文夫=監訳 会津洋/前島和也=訳
 河出書房新社



헌



Г Д Б



文字
HISTOIRE DE L'ECRIURE
の世界史

ルイ=ジャン・カルヴェ
矢島文夫=監訳 会津 洋/前島和也=訳
河出書房新社

Louis-Jean Calvet :

HISTOIRE DE L'ECRITURE

© 1996 by Plon

The Japanese translation rights arranged through le Bureau
des Copyrights Français, Tokyo.

文字の世界史

© 1998 Printed in Japan

1998年 6月25日 初版発行

2000年 4月28日 2刷発行

著者 ルイ＝ジャン・カルヴェ

監訳者 矢島文夫

訳者 会津 洋／前島和也

装幀者 渋谷育由

発行者 若森繁男

発行所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2

電話 (03)3404-8611〔編集〕 (03)3404-1201〔営業〕

<http://www.kawade.co.jp/>

印刷 三松堂印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-309-22327-3

「文字の世界史」目次

監訳者まえがき	4
はじめに	9
1. これまで文字についてどう考えられてきたか	
2. 絵文字と身振り言語	
エクリチュールという語義のルーツを探る	
第1章 文字以前のエクリチュール	27
第2章 文字の発明——楔形文字	41
1. シュメール文字	
2. アッカド語	
3. ヒッタイト語	
4. ウガリット都市国家および古代ペルシアの文字	
5. 原インド文字と関連はあったか	
楔形文字の伝播	
第3章 エジプト文字とその移り変わり	65
1. いくつかの定義づけ	
2. エジプトの文字	
エジプト文字解読の歴史	
第4章 中国の文字	81
第5章 漢字の広まり——朝鮮、ヴェトナム、日本	97
1. 朝鮮の文字	
2. ヴェトナム（アンナン）文字	
3. 日本の文字	
第6章 アルファベットの誕生	109

第7章 アルファベットの拡張 123

ギリシア系アルファベット

1. 謎のエトルリア語
2. イタリア文字
3. コプト文字
4. ゴート文字
5. ルーン文字
6. アルメニア文字とグルジア文字
7. グラゴール文字およびキリル文字

インド系文字

1. インド最古の音節文字
2. 北方文字
3. 中央アジア文字 (チベット文字)
4. 南方文字
5. 東方文字 (パーリ文字)

アラビア系文字

第8章 中央アメリカの文字 173

1. マヤ暦
2. マヤ文字解読の問題点
3. トムソンの解釈
4. マヤ文字の構造
5. リンダ・シーリーの解釈
6. まとめ

第9章 アフリカ——文字の戦い 191

第10章 数の表記 203

1. 楔形文字の数表記
2. エジプト数字
3. 漢数字
4. ギリシア語、ラテン語の数表記

5. 「アラビア」数字

第11章 文字の解読——過去と未来……………	217
1. エジプト文字と線文字Bの解読	
2. 未解読の文字	
おわりに ……………	237
年譜 ……………	241
用語解説 ……………	243
原注 ……………	245
参考文献 ……………	249
訳者あとがき ……………	255
索引 ……………	259

監訳者まえがき

世界文字学のすすめ

個人的な話からはじめて恐縮だが、私は今から40年以上前の1956年にシャルル・イグーネ著『文字』（白水社、文庫クセジュ）という小冊の翻訳を出してから、文字に関する著作や訳書を何冊か刊行する機会があった。今から十数年前、当時ロンドンのブリティッシュ・ライブラリー（BL 英国図書館）の幹部館員であったインド学研究者のアルベルティーン・ガウアー女史が1985年に出した『文字の歴史』の翻訳を引き受け、ヒッタイト学・言語学専攻の大城光正氏と共訳の作業を始めたが、1987年9月はじめにエジプト・トルコ・イスラエルの旅のあとロンドンに立ちより、当時は大英博物館の西北の一画にあったBL事務棟でガウアー女史と会うことができた。同女史とは、二、三度手紙のやり取りをしていたが、彼女にとって日本人と会うのは初めてのことだったかもしれない。彼女はBLで日本語文献を担当している若手のハミッシュ・トッド氏を自室に呼び、三人で一時間半ばかり、それぞれの専門分野の言語や文字のことについて熱心に語りあった。このなかで、トッド氏が言った「日本人は文字に特別の関心をもっている」ということばが私には印象的だった。そしてガウアー女史も私もこれに同意した。

ガウアー女史の『文字の歴史』には、中世日本における文字（書）と文学の関係が取り上げられているが、そのなかで「女性と文字」という一節は次のことばで始まり、『源氏物語』の引用が続く。「10世紀は世界の他のところでは一般的に言えばものさびしく心もとない時代であったのに対し、日本では平安時代が道程の半分

を経たところで、高度に発達し、すべての点で独創的な文化の一形式が生み出された。紫式部の『源氏物語』や清少納言の『枕草子』のようなこの時期の文学作品は、ごく少数の男女がほとんど信じがたい知的洗練と芸術的研磨をもって生きていた宮廷生活をかいま見せてくれる。これらの男女のあいだでは、書の芸術はきわめて特別な地位を占めていた」(原書房版、P.225)。

日本人が文字に特別の関心をもつというのは、ガウアー女史が書いているような知的伝統という側面もあるが、今日の時点で言えば、各種の文字の混ざり合いと、文字文化(新聞・雑誌・図書・各種広告・各種電子情報などなど)の氾濫という現実のせいでもある。なにしろ日本文字体系は、漢字・ひらがな・カタカナの三種混合のほかに洋数字(インド・アラビア系統)、ローマ字(ラテン文字)、そして時にはギリシア文字(α 、 β 、 γ 、 π)などの文字が複雑に用いられているという、他の文字体系ではあまり見られない構造をもっているのであるから。

日本の文字問題は、明治・大正期以後の教育の普及とともに、だんだん厄介になってきた。識字率の向上は、逆に使用漢字の制限(当用漢字・教育漢字の制定)や、表音性の増加(かな・カナ使用による)を促した。カタカナ運動やローマ字運動が活発化した。ラジオや電話の普及により、情報の伝達は視覚よりむしろ聴覚を媒介すべきものと考えられるようになった。さらに第二次世界大戦後の日本では、戦勝国の文化政策が強く推し進められ、英語教育も、それまでの読む英語よりも聴き話す英語が優先されるようになった。

しかし1960年代に政治の世界でそれまでのインターナショナルリズムがナショナルリズムへと移行するとともに、それは言語と文字の世界にも影響を及ぼすことになる。インターナショナルリズムのシンボルであったエスペラント語運動が衰退し、そのかわりに復権したアラブ民族のアラビア文字の広範囲な使用、独立したイスラエル国のヘブライ文字国字化、近年では新たなナショナルリズム(旧ソ連邦の崩壊以後)にともなうモンゴル国の旧モンゴル文字再使用、アフ

リカ諸国における文字制定の動き（これは本書で詳しく取り上げられている）などがその主なものといえる。

他方、情報の世界では、それまでの電話・ラジオに代わってファクシミリ（FAX）・テレビ・パソコン通信の時代となり、視覚言語が大幅に復権している。いまや宇宙を各種の文字情報のデジタル電波が飛びかっているのである。粘土書版から電子ブックにいたる各種の形態の本に「書かれた／印刷された／インプットされた」各種の文字を読み解くことこそ、古代から現代、そして未来における知的世界へのアプローチの、まず第一の手段なのである。

本書は世界各地での現地調査の経験をもつ社会言語学者によって書かれた文字概説であり、従来出ている文字概説書とは一味異なる斬新な切り口が感じられる。より深く文字学の森に進みいるためのウォーミングアップに好適の文字学入門として広くおすすめしたい。

1998年5月

矢島文夫

文字の世界史

はじめに

人類の長い歴史を見渡してみても急激な変動というものはまず見当たらない。大発明の時代というのもたいていは長い熟成の結果であったし、文字の到来もその好個の例の一つであろう。時代はいろいろだが、メソポタミアの^{くさびがた}楔形文字や中国の漢字の源となる最初の絵文字から、最も新しく精製されたアルファベット文字に至るまでには、およそ5000年ぐらいが経過している。それは興味深い5000年であり、人類の創造性のあかしであって、ときには素人の手作りの感もないではないが、究極の一つの課題にむかって営まれた様々な解答を引き出そうとした創造性であった。一つの課題とは本質的に消え去る運命をもった話し言葉をどうやって保持し、書きとめ、伝承していくか、ということであった。様々な解答とは古代エジプトの聖刻文字（ヒエログリフ）、アルファベット文字、マヤの彫刻文字（グリフ）、漢字などであって、これらは字形の面では共通点に乏しいが、全部が人類の書き残したゆるやかな形成史という一つの歴史を形づくっているのである。

その歴史を語りだす前に、この「はじめに」では文字についてこれまで述べられてきた考え方をいくつか振り返り、理論的な枠組みを述べ、いましゃべっては消えてゆくこの話し言葉と、それを残しておく書字体との間の関連を述べてゆこうと思う。

1. これまで文字についてどう考えられてきたか

文字というものは、西欧社会においては、意外に思ったり不安になったりする対象ではなかった。言語には話し言葉と書き言葉という通常二つの形態がある、というだけである。そして言語について誰も疑ってみない既成概念がいくつか生まれ、よく言われる「言葉は空を舞い、書はとどまる」というラテン語の諺がそれを見事に表わしている。実際に「言葉は空を舞う」というこの言い回しの通りだとすると、言葉による伝達ははかないもので、言葉を保ち残す主要な働きは文字が果たすわけで、まさに「書はとどまる」なのである。このようにみると文字は話し言葉に従属しているが、文字の働きによって互いに顔を合わせない話し手どうしも話すことができ、声のとどかぬ彼方へも伝達内容を送信できるのである。

このような考えの延長にさらに文字について二つの主張が展開された。一つは、話し言葉のほうが文字より先に存在したのではないかということ（なぜなら文字は、先行した話し言葉にとって代わり、その消えやすさの埋め合わせをする働きをもつからである）、もう一つは、文字は当然のこととして音声記号としての性格をもっている、というのは、文字が言葉という音声を記録するからである。既成概念からみると、それゆえ、文字は言語に結びつけられており、言語に系属しており、言語に特有な構造的欠陥（消えやすさ）を文字が補っており、こういったことが人類の一方の側の人々に他の側の人々のことを話題として次のように言わせるのである。「文字というものが言語の補充要素であるとする、世界には不完全な言語がいくつかあり、それは書き言葉をもたぬ言語である」。この視点は識字化キャンペーンや非識字者という言い方に明白に反映している。非識字者というのは、世の中一般の解釈では、アルファベットを読めぬ人、読み書き能力を欠く人という原義の意味どころではなく、愚か者を指し、また一方、識字化キャンペーンは単なる識字教育以上に大衆教育普及運動と考えられてきた。

これら既製のイデオロギー的観念を完全に例証したのはなかでもルソーである。彼は文字化の三形式と称してかなり思い切った区分をたてている。

——「声音でなく概念を描く」（古代エジプトの聖刻文字、アステカの彫刻文字を当てている）。

——「語や文をきめられた文字で表わす」（漢字を当てている）。

——アルファベットを用い、言葉（パロール）を分析検討し提示する。

そして彼はこの文字化三形式がやはり三つの時代区分、三つの発展段階に当たるといふ。彼は言っている。「これら三つの記述の方法は、国民として集まった人びとを考察しうる三つの異なった状態に、かなり正確に対応している。事物の描写は未開の民族に、語や文章の記号は野蛮な民族に、アルファベットは政府に統治された民族に一致している⁽¹⁾」

つまりルソーの理解では、アステカ人は原始民族であり、中国人は未開であり、アルファベットを用いる民族だけが文明化されているというわけだ。さらに200年後にわれわれと同世代人クロード・レヴィ＝ストロースははからずもこのルソーの見方のヴァリエーションをわれわれに提供してくれる。それは次のような興味深い経緯においてである。ソルボンヌの高等研究学院（オート・ゼチュード）教授に選任され「未開民族の宗教について」という講義を行った彼は、これら民族出身の学生たちと本質的な議論を経た後、この講義題目は不適當と気づいたという。彼は言う。「ソルボンヌにみんなといっしょに学びに来た学生たちを未開人であると言うことはできません」。彼は題を「文字を持たぬ民族の宗教⁽²⁾」と変えることになった。人類学者としての誠意とか善意は感じとれるとしても講演内容は同じままで、「未開」を「文字を持たぬ」と言い直しただけというのは気になるところだ。

このようにルソーだけでなく、現代においてもこういった人種差別の観点からあまり隔たっていないような提言がされているのである。「文字とは本質的に移ろい易い分節言語を不動なものにし、固定化するため現実に用いられる手法である」とJ・フェヴリエは書いているが、さらに先でこう言っている。「原始人には、頭に概念があって、それが話し言葉になり、ついで書き言葉になるというプロセスがない。彼には名詞に自分の考えを注入し、それを書き留めようとする予め目的を目指した心配りはない。行為する、それだけで満足なのだ。つまり何よりも生きることなのだ⁽³⁾」

考え、名前、文字化、われわれにはこのような論理の流れがあり、これが文化の特徴であるようにみているが、原始人は文字を持っていない。ところでわれわれはきまって人種差別思想のルーツから汲みあげた既成概念のあの愚言録を繰り返すことをいつまでも止めようとせず、それが西欧の優越感を固めているのだ。話を進める前に、科学性の意味をさかさまにとらえて、このような観点を強化した言語学者がいたことを強調しておかねばならない。言語による叙述は話された言葉にのみ依存可能であり、またそうあらねばならないと述べたいばかりに彼らは何度も既成概念を持ちだしては、書き言葉が話し言葉に従属していることを強調してきた。ここにまたその引用を重ねるのは無用であるから、一つだけ近代言語学の祖であるフェルディナン・ド・ソシュールの言葉を引用するにとどめよう。実際ソシュール調というものは現代の数多くの著述に見られる。「言語と書は二つの分明な記号体系である。後者の唯一の存在理由は、前者を表記することだ⁽⁴⁾」

言い方はお互い異なっているとして、それはたいてい些細な差異であるが、言語学者たちはみな文字について同じような観点を抱いている。実は音韻論から生まれた近代言語学の特徴そのものが、この観点を形づくっている。つまり、言語学は文字に対して音韻論的

視線を注いでいるということである。それゆえ、言語学者にとって最良の文字とは、私は言語学者にとって最も疑義を生ぜしめない文字とは、と言いたいのだが、それはアルファベットである。言語と同じく線的特徴を持っているからであり、また文字が音素を表わし、語が形態素または記号素を表わすとみるとき、文字が分節単位と対応しうるからである。しかしながら、以上のことは文字が言語を表わそうという意志から生じたことを何も明らかにしておらず、後述するが、ただ文字の表わす絵画表現が徐々に年月を経て言語の表わす身振り表現に隷属するようになってきたということを示すに過ぎない。

文字体系の分類の試みは著しく数が多い。すでに見たルソーの三つの分類型では、お互いの違いを優劣の段階に転換していたが、その後ソシュールとゲルプの分類があり、紹介しよう。ソシュールの分類型は二元的である。文字体系は二つしかないとして次のように彼は述べている。

「1. 表意文字体系：ここにおいては、語はそれを組み立てる音とは関係のない独自の一記号をもって表記される」

「2. 一般に『表音』文字と称する体系：これは語の中に継起する音のつながりを再現しようとするもの⁽⁵⁾」

彼はここにおいてもまた文字を言語との関連で規定していることがお分かりだろう。

ゲルプの類型論は、とりわけ史的方向づけに特徴があり、四つに分けられている。

——表語文字体系：記号は語を表わす。

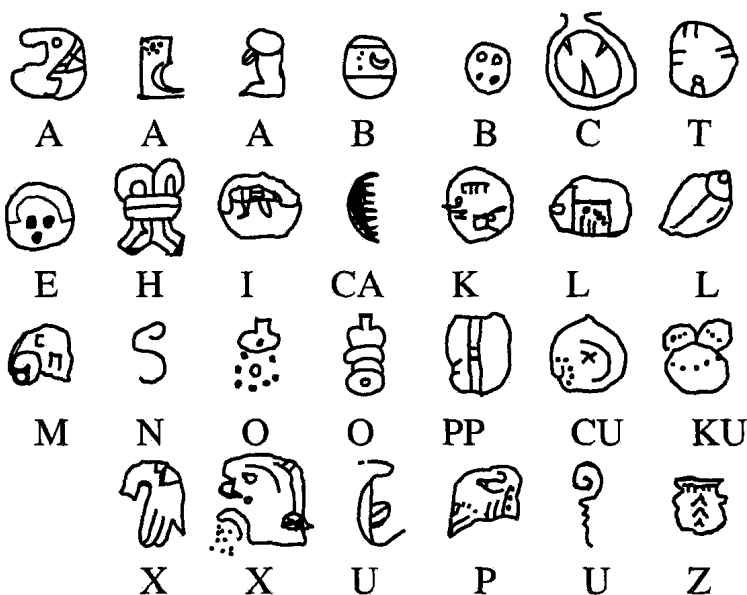
——表語音節体系：表語記号と音節記号とを用いる。

——音節文字：記号は音節を表わす。

——アルファベット文字：記号は音素を表わす。⁽⁶⁾

ゲルプにとって、この四つの型は四つの発展段階に相当しているが、ここでもアルファベットを文字の進歩の過程のゴールとするルソーの目的論的視点を認めることができる。文字を言語に結びつけ、

理想的形態がアルファベットであるとする、この共通的な考えはスペインのフランシスコ派司祭ディエゴ・デ・ランダによって完全に例証されている。彼は1566年に『ユカタン事物記』という、16世紀マヤ人についてまことに貴重な記録を残している。その「第41章 マヤ人の世紀・彼らの文字」にはマヤのアルファベットが記載されている。



問題は、マヤ人はアルファベットを知っておらず、ランダが記したものは、科学的な思いつきではあったが、驚嘆すべき人為的産物の一例なのである。しかしこれがマヤ文字最近の解読作業に侮れぬ貢献を最終的に果たしたことを、第8章で触れることにする。おそらく彼は a、b、c とはどう書くか答えを得ようとしつこく詳細にインディオたちに問うたのであろう、そして彼らはとうとうランダにアルファベットの発音に最も近いグリフを教えたのだ。ランダの知り得たアルファベットの最初の3文字は次のようである。